

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2017

課題番号：15K11701

研究課題名（和文）大学生に対するセクシャリティの発達と自尊感情向上に向けた教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Developing a Sexuality Education Program to Enhance Self-esteem of University Students

研究代表者

坂口 けさみ（Kesami, Sakaguchi）

信州大学・学術研究院保健学系・教授

研究者番号：20215619

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000 円

研究成果の概要（和文）：自尊感情とは「自分自身を価値あるものと認める感情」と定義されるが、わが国においては諸外国と比較して若者の自尊感情の低いことが問題となっている。本研究では性的に成熟する大学生の自尊感情を調査すると共に、関係する要因について明らかにした。また、自身の自尊感情と向き合う機会の多くなる性の問題を核に、セクシャリティの発達と自尊感情向上に向けた教育プログラムを開発し、その成果について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Self-esteem is a subjective emotional evaluation of his or her own worth. Previous research indicate Japanese youth have lower self-esteem compared to their counterparts overseas. In this study we researched university students' self-esteem in relation to their sexual maturation, as well as its relevant factors. Based on our findings, we developed a sexuality education program to enhance self-esteem of university students, and indicated its efficacy and challenges.

研究分野：母性看護学・助産学

キーワード：大学生 自尊感情 セクシャリティ 教育プログラム

1. 研究開始当初の背景

我が国の人口動態統計によると、平成 25 年の出生数は 102 万 9,800 人で、前年の 103 万 7,231 人より 7431 人減少しており、今後出生数は確実に減少すると推測される。この背景には、晩産化、晩婚化が急速に進んでいることがあげられる。また生涯未婚率を指す「50 歳時」の未婚率は、2010 年では女性が 10.1%であるのに対して、男性ではすでに 20.1%に上昇しており、非婚化も急速に進んでいる現状にある。このような社会情勢の中で、2012 年 1 月、国立社会保障・人口問題研究所は 50 年後の日本について、今よりも人口が約 4 千万人減少し、超高齢化社会が到来するとした衝撃的な人口予測を公表した。さらに平成 26 年 5 月、日本創成会議・人口減少問題検討分科会は、25 年後の 2040 年には 20～39 歳女性の減少率が 80%を超過する自治体が全国の 896 自治体に達し、これらの自治体は消滅する恐れがあるとする見解を発表した。しかしこれまでに具体的な施策等はほとんど明らかになっておらず、わが国における少子化への対応は喫緊の課題となっている。

その一方で、今後わが国の少子化対策のキーパーソンに位置づけられる子どもや若者についてみると、様々な心理的特徴や課題があげられる。その代表的なものの一つに自尊感情の低下がある。自尊感情とは「自己に対する評価感情で、自分自身を基本的に価値あるものとする感覚」とされ、私たちが精神的に健康に生きていくために必要な心理的基盤であると定義される。自己肯定感とも言われる。自尊感情は古くは哲学や倫理的立場から論じられてきたが、心理学者の Jeams, W. (1890) が自尊感情は「自己評価の感情」として報告後、心理学的立場から捉えられるようになった。その後 Rosenberg, M. (1965) によって自尊感情を包括的に測定する尺度が開発され、この尺度を用いた様々な報告が行われるようになった。中でも、諸外国の子どもや若者間で自尊感情得点が比較されたが、そのほとんど全ての報告において、わが国の若者の自尊感情得点が有意に低下していることが明らかとなった。平成 26 年度の子ども・若者白書においても、アメリカやフランスなど主要先進国に比較すると、依然としてほぼ全ての項目で自尊感情得点が低い上、特に自分自身への自信や将来への希望、人の役に立つ仕事をしたいと考える項目で得点が低かった。また子供を持ちたいという項目においても低かった。

これまで小・中・高校において児童や生徒らの自尊感情の低下が指摘され、さまざまな取り組みが行われてきた。その成果は一部に認められるものの、全体として充分とは言え

ない。その結果、自尊感情が十分に育たずに、自信がない若者がそのまま大学へ入学してくることになるが、大学においても自尊感情を育てる取り組みは充分とは言えない実情にある。

WHO によると、セクシャリティとは生涯を通じて人間の中心的な局面をなすものであると定義されており、本研究では、セクシャリティを生物学的性(生まれつきの性)、性自認(自身の性別への認識)、性的指向(性的な意識の向かう先)の 3 要素が組み合わさって決定する、その人の性のあり様および性的に成熟する自分自身をどう受容しているかを指すものと定義する。

現在行われている性教育は、知識や経験を一方的に講義する形が多く取り入れられ、性的に成長・成熟する自分とは何かについて考え、検討することや、多様な性を理解できるようなセクシャリティを向上させる教育はほとんど行われてこなかった。さらに、文部科学省が実施した平成 25 年調査によると、全国の小・中・高校で、心と体の性が一致しない「性同一性障害」を抱える児童生徒が 600 人以上いることが報告された。ただしこの数字は、本人が望まない場合は回答を求めておらず、「ほかにも多数いるとみられる」としている。また現在の社会のなかで「これが普通」「こうあるべき」だと思われる「性のあり方」に当てはまらない性的マイノリティに該当するものは、5%にも達すると報告されている(中塚; HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY, 2014)。また障がい者の性についてもほとんど触れられていない。このように多様化する性が存在する社会の中で、自分自身や他人を大切にできるとともに、性的マイノリティなど性の多様性をも理解した上で、自分らしく生きることが今の若者に強く求められているが、その取り組みは充分とは言えない。

2. 研究の目的

本研究は、性的に成熟する大学生が自身の自尊感情と直接正面から向き合う機会の多くなる性の問題を核に、大学生を対象としたセクシャリティの発達と自尊感情向上に向けた教育プログラムを開発することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 大学 1 年生及び 4 年生を対象としたセクシャリティと自尊感情および関連要因に関する調査を行った。自尊感情は Rosenberg, M.によって開発され、山本らによって邦訳(1982 年)された 10 項目からなる尺度を用いた。関連要因として、これまで報告されている家族関係、親の養育態度、過去の学校生

活と充実感の有無、現在の大学生活での満足度や進路の決定に加えて、友人関係や結婚観、恋愛観、異性とのつきあいや性行動等に関するものとした。

(2) 恋愛の過程で、恋人間の暴力として問題となっているデートDV(Domestic Violence、以下DV)に焦点を当て、大学生を対象に、デートDVの実態と関連要因について調査を行った。調査内容は、デートDVの実態とその関連要因であると推測される自尊感情、ジェンダー意識、親子関係、友人関係、暴力容認性などとした。

(3) 若者への性教育が早期から行われている北欧スウェーデンへの海外視察及び市民へのインタビューから、性への考え方や取り組みに関する情報収集を行った。

(4) 大学生を対象としたセクシャリティの発達と自尊感情向上に向けた教育プログラムの開発と評価を行った。

4. 研究成果

(1) 大学生を対象としたセクシャリティと自尊感情および関連要因に関する調査と成果：大学1年生への調査では、研究趣旨を説明し同意を得た大学生477名(回収率74.5%)から回答を得た。その結果、自尊感情は女性に比較して男性の方が有意に高かった。自尊感情との関連要因をみると、親の養育態度では、これまで自分を受容し、また自己の決定を尊重してくれた親では、そうでない親に比較して学生の自尊感情は有意に高かった。大学生活や対人関係では、現在信頼できる人がおり、学校生活への満足度が高い学生は自尊感情が有意に高かった。さらに、自尊感情と恋愛観・結婚観との関係をみると、男性では異性に対して積極的にアプローチすると回答した学生は自尊感情が有意に高く、また結婚意欲があると回答した学生はそうでない学生に比較して自尊感情が有意に高かった。

大学4年生への調査では、研究趣旨に同意を得た大学生218名(39.4%)から回答を得た。その結果、自尊感情得点は1年時と比較してやや高くなっているものの、有意な差は認められず、また性差も認められなくなった。関連要因をみると、大学生活への満足度や講義への積極性が強い学生は、そうでない学生に比較して自尊感情は有意に高かった。親との養育態度では、親への信頼感得点が高い者、及び親が自分の気持ちに向き合ってくれたと感じている学生の自尊感情は有意に高かった。また、自己への身体イメージが高い学生は、自尊感情が高く、さらに、恋愛観・結婚観との関係をみると、異性とのコミュニケーションに抵抗がない学生、および好きな人がいるときに自分から積極的にアプローチすると回答した学生は、そうでない学生に比較して自尊感情は有意に高かった。

これらの調査から、大学生の自尊感情の形成基盤にはまず親の養育態度が強く影響し

ており、親が学生の気持ちに向き合い、受容的な態度でこれまで関わってきていることの重要性が示唆された。また大学生活への満足度や講義への積極性の高い学生の自尊感情が有意に高くなっていた。これは、進路の決定及びその後の大学での講義や学びそのものが自尊感情の形成に影響することを指し示しており、学生のニーズを満たす質の高い講義内容を提供することの重要性が示唆された。さらに、自尊感情は自身の身体イメージへの自信や異性とのコミュニケーション、積極性などの恋愛観や結婚観とも有意な関係を有しており、学生の自尊感情を高めていくことが、学生の恋愛観や結婚観を高めていくことにつながっていることが明らかとなった。

(2) 大学生のデートDVの実態と関連要因に関する調査と成果：対象は大学1年生341人(回収率90.5%)であり、デートDVの実態とその関連要因であると推測される自尊感情、ジェンダー意識、親子関係、友人関係、暴力容認性との関係を調査した。その結果、回答した学生の約半数に交際経験があり、その内、デートDVの加害経験のあるものは40%、被害経験のある者は38%であった。デートDV被害経験は女性の方が男性に比べ有意に多く、加害経験と被害経験の比較では、デートDV加害経験がある者は被害経験も有意に多かった。なお、デートDVの認知については、「内容をよく知っている」と回答した学生はわずか10%であったが、デートDV経験とデートDVに関する知識の有無とは関係がなかった。デートDVに関連する要因として、暴力容認性の高い学生及び両親の仲が悪いと認識している学生はそうでない学生に比較してデートDV被害経験のある者が有意に多かった。女子学生ではデートDVの被害経験と自尊感情の高さには関係があった。またデートDV加害経験のある者は、友人への暴力加害経験が有意に多く認められた。デートDV経験とジェンダー意識とは関係がなかった。

これらの調査から、大学生におけるデートDVの加害経験と被害経験は予想以上に多い上、大学入学時のデートDVに関する知識は充分ではないことが明らかとなった。またデートDVは、交際相手のみならず、友人関係にも影響していることが明らかとなり、大学入学早期にデートDV予防のための教育を導入することの必要性が示唆された。さらに、デートDVは両親の仲の悪さや暴力容認性との関係が強く、生育歴や育った環境、それによって培われた性格や価値観がデートDV経験と関係しているものと推測され、小中高などより早期からの暴力を排除した人間関係構築に向けた教育の重要性が示唆された。

(3) スウェーデンにおける性教育への取り組みに関する情報収集とその成果：

学生の自尊感情を高めるためのヒューマ

ンセクシュリティ教育プログラムの作成にあたり、平成 29 年 3 月に海外視察を行った。北欧スウェーデンでの性に関する教材収集を行うと共に、ハルムスタッド大学の Stig Perttu 先生らを中心に性教育やダイバーシティ教育に関する情報を収集した。またスウェーデンの男性と国際結婚し、その後マルモに 20 年以上暮らす 50 歳代の日本人女性 1 人からスウェーデンにおける性教育に関する話を聞くことができた。

スウェーデンにおけるトイレは男女別々ではなく、男女順番に並んでトイレを使用していた。これは性の多様性への配慮に基づくものである。性教育に関する著書などの教材については本屋に並べられたものは少なく、購入の多くがネット購入とのことであった。その中で今回、幼児年長から小学校低学年対象の性教育テキストを購入することができたが、わかりやすく具体的な絵や図が用いられており、詳細な内容に驚いた。

スウェーデンは様々な文化や宗教、ジェンダーを有する人々が暮らしているが、様々な人の人格と個性を尊重し、認め合い、全員参加を前提とする福祉国家であるという。性教育については、医療専門家もしくは教師から小学校高学年から中学生の頃に性交の絵や写真、および模型を用いた避妊具の装着方法などが具体的に教えられているとのことであった。そこで質問があれば教師や、家に帰れば両親に尋ねることになるが、誰もがその状況をきちんと説明するとのことであった。そのため、子ども達は教師や親とは対等に性について話ができること、性とは恥ずかしいことよりも楽しい、すばらしいことと認識している若者が多いということであった。

以上、スウェーデンへの視察を通して、性教育については多様な性、交際、具体的な避妊等について、わが国ではいつからどのように教育することが必要なのかを今後真剣に議論する必要がある。また教える側が生と性、性のすばらしさを伝え、教えられる側も対等に性について議論できるような場作りの重要性が示唆された。

(4) 大学生を対象としたセクシュリティの発達と自尊心感情向上に向けた教育プログラムの開発とその成果：上記(1)～(3)によって得られた成果、及び社会情勢を加味し、教育プログラムの達成目標として下記に示す～を作成した。性的になる自分の変化を肯定受容し、異性の変化も理解できる。

コミュニケーションの原則と妊娠の原理がわかり、暴力にならない行動を選択できる。

性感染症の基礎を理解し、自他の健康を損なわない行動を選択できる。自分とパートナーの心身の発達の変化と特徴を知り、何のための発達かを理解できる。今ここに存在している自分と結びつけて、生命と性と親子の関係が理解できる。障がい者や LGBT (性的マイノリティの総称) などの性の多様性と男女の対等性を理解し、対等な関係性に

向けて努力できる。様々な保健情報や性情報を主体的に読み解き、適切な選択ができる。

これらの達成目標に基づき、教育プログラムを完成させた。開講年次は 1 年次後期の 15 回開講とした。具体的内容は、性感染症の現状と予防および避妊(3 コマ)、性的に発達する意味と自分を知ること・生きること・自信が持てること・自他を大切にできること(2 コマ)、ライフサイクルと性(2 コマ)、男性の性・女性の性の違い(1 コマ)、デート DV(1 コマ)、性的搾取(1 コマ)、障がい者の性(1 コマ)、LGBT(1 コマ)、妊娠の成立と人工妊娠中絶(2 コマ)、性と文化(1 コマ) とし、適宜講義及び演習を行いながら、教育プログラムを展開した。

評価については、参加した学生約 150 人から得た授業評価及び「本プログラム受講を今後の人生にどう活かすか」に基づくレポートをもとに、プログラムの成果を分析した。その結果、本プログラムに基づく受講満足度は 85% が満足できると回答し、学生にとってニーズに適した内容になっていることが裏付けられた。またレポート内容からは、【人類の必修科目である。誰もが受講すべき内容である】【性を性科学という学問として理解できた】【最初は冷やかしか半分に出席したが、講師陣の真剣な態度に、性について真剣に考えるようになった】【I am OK, You are OK、自他を認めることの大切さと重要性を知った】【自分に自信がなかったが、自信を持って今の自分を受け入れる気持ちになった】【言い換え work を通して、自分の欠点が欠点ではなくなることを知った。人間関係を築く上で必要なコミュニケーション技術を学んだ】【男女ペアでのグループワークを通して、自分のコミュニケーション技術のなさを知った、しかし人の輪が広まり、人と話をすることの楽しさを知った】【相手の話を聴くことの基本を知った】【妊娠や中絶から、生命の尊さを知った】【生と性が密接に結びついていることを気づかされた】【自分がどのように育てられてきたのか、また親との関係を改めて振り返る機会となった】【LGBT や障がい者の性を知り、皆が対等に生きることができる世界を作ることの重要性を知った】【人身取引・性的搾取のわが国の実態を知り、ショックを受けたが、性を正しく認識し、適切な行動がとれることの重要性を知った】等が挙げられた。

以上、達成目標を上回る成果を確認することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

芳賀亜紀子、徳武千足、坂口けさみ、米山美希、鈴木敦子、金井誠、市川元基、大平雅美、ダウン症候群の子どもを受け入れ育てる育児経験のある両親 1 組の思い、長野県母子

衛生学会誌、査読有、19 巻、2017、23 - 29

徳武千足、芳賀亜紀子、松崎ちはる、伊藤葵、河西真理子、上原さとわ、坂口けさみ、米山美希、鈴木敦子、市川元基、金井誠、太平雅美、初めて親になる夫婦に対する親になるための講座が妊娠期から分娩までの思いや行動に与える影響、長野県母子衛生学会誌、査読有、19 巻、2017、13 - 22

〔学会発表〕(計 7 件)

鮫島敦子、二茅真帆、飛澤麻央、神谷笙子、宮川愛、坂口けさみ、芳賀亜紀子、徳武千足、鈴木敦子、米山美希、金井誠、市川元基、太平雅美、大学生の自尊感情と対人関係、親子関係、身体イメージ、及び恋愛観・結婚観との関係について、第 20 回長野県母子衛生学会学術集会、松本、2017.11.

二茅真帆、飛澤麻央、神谷笙子、宮川愛、坂口けさみ、芳賀亜紀子、徳武千足、鈴木敦子、米山美希、金井誠、市川元基、太平雅美、大学 4 年生の自尊感情が大学生活や対人関係、恋愛観・結婚観に与える影響について、第 58 回日本母性衛生学会学術集会、神戸、2017.10.

飛澤麻央、二茅真帆、神谷笙子、宮川愛、坂口けさみ、芳賀亜紀子、徳武千足、鈴木敦子、米山美希、金井誠、市川元基、太平雅美、大学 4 年生の生活、対人関係及び身体イメージと恋愛・結婚に対する意識、第 58 回日本母性衛生学会学術集会、神戸、2017.10.

Kesami Sakaguchi, Chitaru Tokutake, Akiko Haga, Miki Yoneyama, Sayuri Tanaka, Shiori Sano, Makoto Murata, Chie Kodama, Masayoshi Ohira, Motoki Ichikawa, Makoto Kanai. The relationship between self-esteem and school life, parenthood, awareness of love and marriage among university students. The ICM Asia Pacific Regional Conference 2015 (Yokohama). 2015. 7.

Miki Yoneyama, Kesami Sakaguchi, Akiko Haga, Chitaru Tokutake, Ayana Ogiso, Asuka Kobayashi, Yukari Hara, Natsuko Miyamoto, Motoki Ichikawa, Makoto Kanai, Masayoshi Ohira. The effect of the lecture on support for father's Childcare. The ICM Asia Pacific Regional Conference 2015 (Yokohama). 2015. 7.

Akiko Haga, Chitaru Tokutake, Kesami Sakaguchi, Miki Yoneyama, Atsuko Suzuki, Masayoshi Ohira, Makoto Kanai. Heart rate variability analysis of term infants on early skin-to-skin contact. The ICM Asia Pacific Regional Conference 2015

(Yokohama). 2015. 7.

Chitaru Tokutake, Kesami Sakaguchi, Akiko Haga, Miki Yoneyama, Atsuko Suzuki, Makoto Kanai, Motoki Ichikawa, Masayoshi Ohira, Keisaku Fijimoto. Changes in desaturation episodes and autonomic nerve function after birth in full-term infants. The ICM Asia Pacific Regional Conference 2015 (Yokohama). 2015. 7.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂口 けさみ (SAKAGUCHI, Kesami)
信州大学・学術研究院保健学系・教授
研究者番号 2 0 2 1 5 6 1 9

(2) 研究分担者

芳賀 亜希子 (HAGA, Akiko)
信州大学・学術研究院保健学系・講師
研究者番号：1 0 4 3 6 8 9 2

徳武 千足 (TOKUTAKE, Chitaru)
信州大学・学術研究院保健学系・講師
研究者番号：0 0 4 6 4 0 9 0

山崎 浩司 (YAMAZAKI, Hiroshi)
信州大学・学術研究院保健学系・准教授
研究者番号：3 0 3 7 8 7 7 3

金井 誠 (KANAI, Makoto)
信州大学・学術研究院保健学系・教授

研究者番号：6 0 2 1 4 4 2 5

大平 雅美 (OHHIRA, Masayoshi)
信州大学・学術研究院保健学系・教授
研究者番号：5 0 2 6 2 7 3 8

市川 元基 (ICHIKAWA, Motoki)
信州大学・学術研究院保健学系・教授
研究者番号：6 0 2 2 3 0 8 8

米山 美希 (YONEYAMA, Miki)
信州大学・学術研究院保健学系・助手
研究者番号：9 0 7 4 7 8 9 1

鮫島 敦子 (SAMEZIMA, Atsuko)
信州大学・学術研究院保健学系・助教
研究者番号：5 0 7 5 9 3 6 3

(3)連携研究者

(4)研究協力者

神谷 笙子 (KAMIYA, Shoko)
飛澤 麻央 (TOBUSAWA, Mao)
宮川 愛 (MIYAGAWA, Ai)
二茅 真帆 (NIGAYA, Maho)
北澤 和希 (KITAZAWA, Kazuki)
飯森 華恵 (IIMORI, Hanae)
浅野 佑佳 (ASANO, Yuka)
玉村 咲季 (TAMAMURA, Saki)
吉田 麻美 (YOSHIDA, Asami)
佐野 紫織 (SANO, Shiori)
村田 諒 (MURATA, Makoto)
田中 さゆり (TANAKA, Sayuri)
児玉 千恵 (KODAMA, Chie)